

鈴木会頭コラム 地元でお金を廻す

会頭所信の最後に「地元でお金を循環させたい」と書きました。少しその話をさせてください。経済学の先生からは物事を単純化しすぎると叱られるかも知れませんが、例えば、皆さんが経営者としてお店や工場や事務所などの経営に日々頭を悩ませ、一所懸命に努力し、社員さんにお給料やボーナスを払っています。さて、そのお金はどこへ行くのでしょうか。社員さんは同時に消費者でもありますので、いろいろな買い物をします。地元には本社があるお店で買い物をしてくれれば、その売上というお金は地元の会社に入り、その一部はその会社で働く社員さん(同時に地元の消費者でもある)に給与として渡ったり、またその会社の利益になり、その一部が税金として納められることとなります。シャッター通りと揶揄される商店街の空洞化もそんな観点で見るとまた別の課題が見えてくるようです。

また、私たちは努力の結晶である利益の中から税金を支払います。行政はその税金を使って、公共施設を建てたり、道路や橋を作ったり直したり、役所で使う備品を買ったりしているわけです。お金の流れを追いかけてみると上記と同じような構図が見えてきます。

公共工事をする業者、役所へ物品を納める業者が地元でなければ、私たちの税金を原資とするそのお金は外へ流れ出していきます。もちろん価格と品質は厳しく精査されるべきですが、ちょっと安いからと言って大切なお金を外へ流出させていいかどうかという疑問が残ります。地元の業者優先というのは単に地元業者の益を確保するためという利己的な目的だけではなく、お金の流れという広い視点で考えるべきことだと思います。

お給料でも税金でもいろいろな経費でも、やっとなんと支払ったらおしまいではなく、そのお金がどこでどう使われているのかにも興味と関心を持つべきだと思います。

地元にお金を循環させるために会議所としてやれること、やるべきことが見えてきてように思います。

追伸:会員満足度調査にご協力、ありがとうございました。ドキドキしながら、現在

鋭意、集計・分析中です。まとまりしだいに結果をご報告いたします。

会頭 鈴木悌介